

「いじろ」 3 Kの真実 その一

本当はKはどうしたんだろう？

次の表現は「K」の言動・心情を「私」が見たり、聞いたり、推測したりして記述しているものである。しかし、それが「真実」であるとは限らない。それでは、それらの記述から「Kは実際はこうした」と判断できることを探っていこう。

次の各表現からKは外見上どのような行動をしたのか、記しなさい。

(一) 120上08
Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。

(五) 120下03
いったん声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

(二) 120上09
しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。

(九) 20下06
彼の口元をちよつと眺めたとき、私はまた何か出てくるなとすぐ感づいたのですが、それが果たして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。

(三) 120上15
私はとうとうなぜ今日に限ってそんなことばかり言うのかと彼に尋ねました。そのとき彼は突然黙りました。

(七) 120下08
だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられたときの私を想像してみてください。

(四) 120下01
彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口の辺りをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みもこもっていたのでしよう。